

平成21年 4月20日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18320006

研究課題名（和文）医療倫理学の方法論における〈原則〉と〈物語〉の統合についての研究

研究課題名（英文）A study on methodological integration of principle based and narrative-based approaches in healthcare ethics

研究代表者

宮坂 道夫 (MIYASAKA MICHIO)

新潟大学・医歯学系・准教授

研究者番号：30282619

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：分科—哲学、細目—哲学・倫理学

キーワード：医療倫理、生命倫理、方法論、倫理原則、物語

1. 研究計画の概要

本研究は、医療倫理学の方法論を、「原則論か物語論か」という二者択一ではなく、両者の方法論上の関係を検討し、両者の有機的な結合の基盤を構築することが本研究の目的である。具体的には、以下の3点を明らかにすることを目指した。

①ナラティブ・データによる倫理的ジレンマの再構成—医療の諸領域における倫理的ジレンマを、当事者の語り（ナラティブ・データ）によって再構成する。

②倫理的ジレンマの物語論的分析—当事者によって認識されている倫理的ジレンマの物語論的な構造を分析する。

③物語論的に再構成された倫理的ジレンマの、原則論的な分析—物語論的に再構成された倫理的ジレンマについて、倫理原則への参照や、それをを用いた推論が可能かについて検討を行う。また、これまで欧米の研究者らによって提案されてきた原則のセットが、十分に適用可能なのか、それともさらに別の原則を要請するののかを検討する。

2. 研究の進捗状況

上記目的を達成するために、(1) 文献資料の収集、(2) ナラティブ・データの収集、(3) 理論的構築という3つの方法を採用した。このうち、(1) に関しては、主な成果として、英語圏での医療倫理学における物語論（ナラティブ・アプローチ）のレビューを公刊した。

(2)・(3) に関しては、上述の3つの研究目的（①ナラティブ・データによる倫理的ジレンマの再構成、②倫理的ジレンマの物語論的分析、③物語論的に再構成された倫理的ジレンマの、原則論的な分析）について、理論的

基盤をある程度構築することができた。特に、医療倫理学の既存の有力な方法論であるジョンセンらの決疑論的方法（「臨床倫理」）、およびピーチャムとチルドレスの原則論的方法（「四原則」）と対比して考察し、ナラティブ・アプローチが備えるべき条件について検討し、公刊した。

3. 現在までの達成度

前項で具体的に述べたように、3つの研究目的（①ナラティブ・データによる倫理的ジレンマの再構成、②倫理的ジレンマの物語論的分析、③物語論的に再構成された倫理的ジレンマの、原則論的な分析）を全体としてかなりの程度達成できていると考えている。

4. 今後の研究の推進方策

情報収集において、【A】性と生殖、【B】終末期医療、【C】医療資源としての身体利用、【D】患者の権利と公共の福祉の4領域について行う計画であったが、このうち【A】のセクシュアリティが比較的情報量が少ない状況にあるので、これを最終年度で可能な限り補う計画である。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

- ①. 宮坂道夫, 坂井さゆり, 山内春夫: 日常臨床における医療倫理の実践, 日本外科学会雑誌, 110(1), 28-31, 2009
- ②. 宮坂道夫: 医療と危害 — ハンセン病政策に見る「よかれと思って」の加害, 作業療法ジャーナル, 42(3), 203-208,

2008

- ③. 宮坂道夫: 私たちの生命倫理学は、なぜハンセン病問題を知らずにきたか、生命倫理, 17 (1), 93-99, 2007
- ④. 宮坂道夫: 難病患者と「尊厳死問題」— 死についての、自己による事前判断の倫理的妥当性への疑問 —, 医学哲学医学倫理, 25, 137-141, 2007
- ⑤. 宮坂道夫, 荻 雄二, 佐川 修, 鈴木幸次, 田中和子, 斉藤 悟: 重監房とは何だったのか (ハンセン病市民学会・分科会B報告), ハンセン病市民学会年報, 2007
- ⑥. 宮坂道夫: 「胎児標本」問題について考えるために — 生命倫理学の視点から —, ハンセン病市民学会年報 2006, 127-140, 2006
- ⑦. 宮坂道夫: 医療, 規範, 物語 — 医療倫理学の方法論をめぐって —, 法社会学, 64, 116-129, 2006

他 2 件

〔学会発表〕(計 16 件)

- ①. Michio Miyasaka: Neuroethics: A Welfarist Perspective on Brain-Machine Interfaces in the Context of Japanese Health Care Culture, Asian Bioethics Association Ninth Asian Bioethics Conference, 3-7 November 2008, Hotel University Sunan Kalijaga, Yogyakarta, Indonesia
- ②. 坂井さゆり, 酒井菜津子, 宮坂道夫: 新潟水俣病患者を支援し続ける人々の物語 — スライド・フィルムを使った「ナラティブ生成」インタビューの試み —, 日本質的心理学会 第5回大会, 2008年11月29・30日, 筑波大学
- ③. 酒井菜津子, 坂上 香, 坂井さゆり, 宮坂道夫: 想起のプロセスにおける「言いつばなし聞きつばなし」の語りの検討, 日本質的心理学会 第5回大会, 2008年11月29・30日, 筑波大学
- ④. 若菜健介, 酒井菜津子, 坂井さゆり, 宮坂道夫: ドナー家族にとっての「脳死」と「臓器提供」, 第14回日本臨床死生学会, 2008年9月6・7日, 札幌
- ⑤. 坂上 香, 酒井菜津子, 坂井さゆり, 宮坂道夫: ライフストーリーのなかで考える「献体」, 第14回日本臨床死生学会, 2008年9月6・7日, 札幌
- ⑥. 坂井さゆり, 宮坂道夫: 認知症高齢者や意思表示の困難な高齢者に対する緩和ケア, 第13回日本緩和医療学会学術大会, 2008年7月4・5日, 静岡
- ⑦. 宮坂道夫: 重症心身障害児(者)のケアの方針の決定についての倫理的問題

の検討, 第19回日本生命倫理学会年次大会, 大正大学, 東京, 2007年11月10-11日

- ⑧. Michio Miyasaka: Who is the identified, and who is the abstract? - Proximity, indifference and public policy, XXIth European Conference on Philosophy of Medicine and Health Care Ethics, Cardiff University, Cardiff, United Kingdom, 15-18 August, 2007.
- ⑨. Michio Miyasaka: Neuroscience and basic medico-ethical principles, Fifth Interdisciplinary Conference Communication, Medicine & Ethics, University of Lugano, Lugano, Switzerland, 28th-30th June 2007.
- ⑩. Michio Miyasaka: Autonomy, Dignity, and Compassion: Dying with Dignity in the Context of Japanese Culture, Eighth Asian Bioethics Conference Biotechnology, Culture, and Human Values in Asia and Beyond, Century Park Hotel, Bangkok, Thailand, March 19-23, 2007.
- ⑪. 山崎節子, 宮坂道夫 祖母・母・娘のライフストーリーから考える関係性と倫理 — 病いと老いと言葉をめぐって —, 日本質的心理学会 第4回大会, 奈良女子大学, 奈良市, 2007年9月29日-30日
- ⑫. 宮坂道夫: 生命倫理の立場から胎児標本問題の底に何かがあるかを考える, ハンセン病市民学会シンポジウム「胎児標本問題から考える検証の必要性」, 東京, 2006年11月12日

他 4 件

〔図書〕(計 3 件)

- ①. 野口裕二編: 『ナラティブ・アプローチ』, 勁草書房, 2009年, (第7章「生命倫理とナラティブ・アプローチ」)
- ②. 宮坂道夫: 『ハンセン病 重監房の記録』, 集英社, 2006年
- ③. 江口重幸, 斉藤清二, 野村直樹編: 『ナラティブと医療』, 金剛出版, 2006年, (p.82-92「医療倫理の方法としての物語論」)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ

<http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~miyasaka>